
造られた天使

君影 涼藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

造られた天使

【NZコード】

N4692A

【作者名】

君影 涼藍

【あらすじ】

若手ジャーナリスト、アルマの前に現れたのは名前のない少女。聞けば彼女は、研究室での実験から逃げ出した人間兵器『天使』だという。幼く可愛らしい少女の手を引き追つ手から逃げるうちに、次第にアルマは心惹かれていった……

【序章】 叫び そして空へ

投与される薬。
繰り返される実験と検査。

アツイ

眩暈。吐き気。

全身をめぐる激痛。

作られてカラダ。

ウデ、アシ。

セナカに……

チガウ！ コレハ、ワタシノジャナイツ……！

もがく腕。

掴みあげたモノは白い……白くて。

ハナシテツ！ ダシテツ！

壊された……。
造られた……。

私は一体、何なの

【第一章】衝突

「で？ 結局いくらで買ってくれるわけ？ 俺の記事」

黒髪にサングラス。

護身用の銃をくるくると弄びながら、電話越しに彼はにやついた。

「わちらさんの部下による麻薬密売情報 あんたらがまさかそんなもんに手を出したなんてねー……」

組織の違法情報を売りつけた。

それが彼、若手ジャーナリスト、アルマのやり方だ。

「言つとくが、ちやーんと証拠も掴めてんだからな……なんなら号外にしてばら撒いてやううか？」

時々はつたりをかましたりもするが、今回は自信のある情報だ。

買い物手も富豪。

大金をがつぽり手にしたいところである。

「はあ！？ そんなんで売れつかよ。……ああん？ んー……はあ、まあ仕方ない」

銃を懷にしまいこみ、座っていた椅子から立ち上ると、再び不適に微笑んでアルマ言つた。

「んじやあ、お約束した金額、きつちつ例の講座に振り込んでてくれよ」

念押しの決まり文句。

多少値は落ちたが、良い具合に話がまとまった。

アルマは受話器を置くと、宿泊している宿のベランダに出た。

快晴！ とまではいかないが今日も良く晴れでいる。

と、満足そうに笑みを浮かべるアルマの顔が急にかげった。
黒い影がベランダ……いや、部屋を垣掛けでとんでもないか。

一、二回の瞬きの間にそれはアルマの田の前まで迫り、衝突した。

高さとスピードの割りには軽いものの、やはり眉を寄せなければいけない衝撃ではあった。

見事に物体と共に部屋へすべりこむと、テーブルに激突。
派手な音まで響かせ、ついでに私物までぶちまけてしまった。

【第一章】 アナタ、だあれ？

木製の天井が見えた。

天国は見えないが、とつあえず体のあちこちが痛かった。

横目で、できるだけ部屋中を見渡してみると、汚かった。さつきまできちんと整頓していた書類は散らばっている（しかも中には、くしゃくしゃになつたり、やぶれていたりするものもある）し、木製の安っぽいテーブルは倒れ、しかも一部、形が変わつていて。

（弁償させられんのかな……これ）

と、のん気に考えていたかつた。それがアルマにとつても精一杯の現実逃避だつた。が、いつまでもこつしてはいられない。その証拠に自分の腹の上に何かが乗つていた。

（せつとき、なーんか見えたんだよなあ）

普通じやありえない。自分の目はもしかして、節穴なのか！？ とまで思えてきた。

「…………よしつー」

何に対しての掛け声なのか、アルマはそう呟くと思つて身を起こした。そして……

「コンツー

「げつ……！」

腹の上から何かがすべり落ちた。やつぱりそうか、と思いたいといつたが、誤算が二回にはあった。

「お、おんなのこお……つー？」

思わず叫んでしまって口を抑えつけた。しかも、眼を逸らしてしまつてではないか。

（落ち着け……落ち着け、俺。第一なんでこんなところに、女の子が）

深呼吸を荒っぽくし、気持ちの整頓をすると、再び床へと目を向けていた。

「……」

青みがかつた銀色の髪。肩の辺りで切りそろえられていくそれは、人間がもち得ないような美しさを放っていた。まつ毛の色も、同じく色素が薄く、部屋の電灯の光を跳ね返して照り輝いている。

「……子供か？」

アルマはじつと少女の顔を覗き込んだ。少なく見積もつても、5、6歳は年下のようだ。

生地の薄い真っ白なワンピースのようなものを身にまとい、露出し

た体はそれに負けず真っ白であった。

「んつ……」

「……」

少女は眉根を寄せた後、うつすらと目を開けた。

それからほつと気がついたように、もともと大きかった目を更に大きく見開いた。

髪と同じく色素の薄い……それでいて輝くように眩しい瞳があらわになる。

むくりと、むくり起き上ると、今度はアルマの顔を覗き込んだ。きょとんとしたその表情のせいか、至近距離で見つめられたことからか、アルマの鼓動は仄かに加速した。

「えつと……君、誰?」

いくら年下だといっても、この姿はアルマの氣を惹くに十分な美しさを持っていた。

ただし、アルマが口説くにしては、この少女の顔立ちはあまりに幼すぎている。

「お前……」

少女は、言葉の意味を理解しようと勤めているかのように、おつむ返した。

「……やつ、名前」

「ない」

「はあー?」

「ないの……つけて

せがむよつこ、甘えるよつなその表情に、アルマは戸惑つ。質問に
対する答も驚くべきものであつたのだが、幼く可愛らしい顔を前に
してはそれどこのではなくなつた。

「えつと……じゅあ、どうして空から落ちてきたんだ？」

「……逃げた。研究室から飛んだの」

「飛んだ？」

「うん、ほりう」

少女が背中をアルマに見せた瞬間、そのきやしゃな体から白い羽根
が舞い上がり、それと同時に見事な翼が生えあがつた。

「造つたの。造られたの……でも、実験とか薬とかやなことこつぱ
い。痛くて痛くて仕方がないの。だからヤになつて、飛び出した…
…名前、あつたけど忘れちゃつた。それに、前の名前あんまり好き
くないから別のが良い。つけて……」

「……つ」

そういうえば、前に一度アルマは聞いたことがあつた。どこかは知ら
ないが、人工的に天使とかいうモノを造るうとしている組織がいる
ということを……。

（噂は本当だつたのか……）

アルマが黙つていると、少女は近距離のままアルマを見詰めてきた。
名前を決めるまで、その動作が続きそつだつたので、とりあえずアルマは頷く。

「わかつた……ちょっと待て。すぐには、思いつかねーから

「うん。わかつた、待つ。アナタ、だあれ？」

「……アルマ。これでもジャーナリストな

「アルマ……よろしくアルマ…」

そういうと、こいつりと少女は微笑みを浮かべた。

そのあまりの無防備さに、アルマの心も彼女に打ち解けようとする。

「……つー」

のも束の間、少女は急に立ち上ると、今までにない険しい顔つきになつた。

「ぐぬっ……

【第二章】 逃亡

「……来るつ！」

「え？」

一体何が、そう尋ねるより早く少女は動いた。

先程示した、大きな翼を広げるとベランダへと走った。

「アルマ、こっちつ

促されるまま、アルマはベランダへと向かつた。
と、同時に部屋のドアが勢いよく吹き飛ばされた。

「！」

ドアは木片と化し、炎に包まれながら宙を舞つたかと思つと、地に伏すより早く灰となつて風の思つがままとなつた。

開け放たれたドアからは、三人の男達が入つてくる。
金髪が二人、銀髪が一人。

「兄さん……」

少女は、半分悲鳴のような声を上げると、一歩後ずさつた。

反射的にアルマの腕を掴む。

「コウウ……帰るが

左目に傷を負つた金髪の男が言った。

「イヤツ！」

「お前の我儘のせいで、一体何人の人間が犠牲になると思っているんだ？」

「その男だつて、例外じやないんだぞ」

他の男達も口々に言ひ。

「お前」ときに人ひとりの命を負うほどの価値があるつていうのか？」

「お前など、一兵器にすぎないだらつ」

「リュウ……帰ろつ？」

最後に銀髪の男が言った。

一番穏やかな口調だつた。

少女、リュウが悩むには十分すぎる優しい声だつた、が……

「いや、私は戻らない！」

少女は大きく翼を広げると、何事かを叫んだ。

彼女の周りが青白く輝いたかと思うと、たちまち翼から光線のようなものが発射され三人を襲つた。

爆発音。

あちこちで火花が散り、激しく部屋中を破壊していく。

男達とアルマ達の間に煙幕が生じたのに乘じて、二人はベランダから飛び降りた。

が、下にも一人ほど追手が居たようだ。

金髪の女と、背の高い灰色の眼をした男だ。

「一人だけ逃げられると思ったら大間違いよ、リュウー！」

女は銃のようなもの構えている。

「戻らないのなら、強硬手段だ」

灰の眼の男が言つた瞬間、女が発砲した。

発射された弾はあちこちに無造作に飛んだかと思うと、物体にぶつかった瞬間爆発した。

「な、何なんだ？」

「アルマ、後で説明する。下がつて！」

少女は再び翼を広げた。

今度は、少女の体ではなく翼全体が光を帯びたかと思うと、すぐさまそれは鋼鉄化する。

次なる攻撃へ向けて女が銃器を構えた。

しかし、それよりも速く少女の攻撃は実行された。

鋼鉄化した翼から、刃物のような羽根が繰り出され、女の銃器に命中。

羽根は、銃器にささると、先程の女の銃弾のように爆発した。銃器だけを見事に壊した、という点では幸いだつたであろう。

自分の攻撃を取つて返され、苦難の表情を浮かべる女の横で今度は灰の眼の男が動く。

男は拳を固めると、少女に突進。

攻撃の直後で、少女も安易に動けない状況だった。
反応が少し遅れる。

(やばい……！)

アルマは懐から、銃を取り出すと、男の腕を目掛けて発砲した。

「一」

銃弾が当たり、男の動きがやや鈍くなったところを、アルマは少女の腕を引き自分の方へと手繰り寄せた。

男の拳が鋼鉄化から戻った翼にかすり、嫌な音を立てて焦げついた。

ふらつく少女を抱きとめ、再び男の足に発砲。割と近距離、男は低いうめき声を上げた。

少しは足止めになるだろ？

ついでにの方にも威嚇で発砲しておいた。

「行くぞっ！」

「うん……」

とりあえず、少女の手をひいて一人のもとを走り去った。

宿から煙が立ちこめ、主人や他の客人達が騒いでいるが、気にしている余裕などほとんどない。

アルマの頭には、もうこの少女の手を引き、新しい隠れ場を探すことしかなかつた。

【第四章】 休息

日が沈んだ頃、アルマは少女を連れて新しいホテルにチェックインした。

少女は疲労困憊といった様子で、ソファに座るアルマに寄りかかっている。

戦闘では、かなり無理をしたのであらう。

眠たそうな瞳をして、アルマを見ずに話しかける。

「天使ってね、新しい兵器のことなの。だから私も兵器なの……」

アルマは答えずに少女の髪を撫で付けた。

艶やかな髪がいとおしい。

こんなに幼い少女が将来兵器として活用される使命にあるとは……本当に氣の毒でならなかつた。

「さつきの人達、みーんな本当のお兄さんとお姉さんなんだよ。私は六人兄弟の末っ子なの。

名前呼ばれてたけど、実験用の名前なんだよ、あれ……」

自分の髪を撫で付ける腕に擦り寄つて、少女はうとうとした。
それから、甘えるようにアルマを見つめる。

「名前……考へてくれた?」

「……」

「私、普通に人間らしい名前がほしいの」

少女は眠たそうに、目の端をこすつた。

「名前……何でも良いのか？」

「うん。数字じゃなかつたら、何でも良い」

(数字……実験用の名前は数字と同じ意味だったのか)

少し哀しくなつたが、それを紛らわせてアルマ微笑つて言った。

「リーリア……」

「リーリア？」

「そう、リーリア……俺の大切な人の名前と一緒にだ。あまり名前を付けるのは上手くないんだ。

……それで良いか？」

(人の名前と同じだなんて、少し失礼だつたかな?)

「イヤだつたら、また別のを考えるが……」

「ううん。良い」

少女は、にっこり笑つた。

満足そうな笑顔で、アルマにもたれかかる。

「リーリアで良い。リーリアが良い……ありがとう、アルマ」

あまりにもあつさり、受け入れられてしまつた。

「どういたしまして……リーリア」

その言葉に、またリーリアはにっこり笑つた。

そして、再び眠たそうな表情になる。

「アルマ……優しい人。アルマ、大好き」

「え？」

突然の言葉に、アルマは驚いた。

恋の告白にしてはあまりにも、緊張感がない。

（人間として……って入れるよ。びっくりするなあ。でも、まあ仕方がないんだろうけど）

「大げさだぞ、名前くらいで」

「ううん。アルマは良い人。だから、好き」

つたない言葉使いが、いつそリーリアの幼さを引き立てた。それが可愛らしくて、変に息が詰まりそうになる。

アルマはリーリアの髪をまた撫で付けた。

「ありがとう、な？」

「アルマになら、全部あげられるのに……」

「え？」

「私の力も……私自身も何もかもあげて良いのに」

実際に眠たそうな聲音だったが、アルマの脳に鋭く響き渡った。

おそらく彼女は兵器、つまり今まで物として扱われてきたのである。

だから、きつとここんな言い方しかできないのだ。

（哀しい……やつ）

「子供が……ませたことをいつもおじやない」

半分泣き声でアルマは咳き、リーリアの頬をつねった。本当はもつと優しく触れて、抱きしめてやりたかったが、理性が彼を押し留めた。

「だつて、わかんないんだもん……」ぱい好きな感じつてどんな言葉を使えば良いのか……」「

それから暫く沈黙した後、リーリアは思いついたようになにか言つた。

「アルマは私が守る……」

逆だらう、ヒアルマが指摘しようとした時、彼女は既に夢へと誘われていた。

長いまつげで影ができた頬が愛らしかった。

「一緒に、逃げような……」

ソファからリーリアを抱きかかえてベッドに移すと独り言のように呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4692a/>

造られた天使

2010年10月11日23時01分発行